福山大学　大学教育センター　大学教育論叢
第 3 号（2016 年度）　2016 年 3 月発行

第三回教育改革シンポジウム講演記録

地域と大学―人口減少時代の高大接続・高大連携を考える

倉元　直樹
（東北大学高度教養教育・学生支援機構　高等教育開発部門入試開発室教授）

地域と大学―人口減少時代の高大接続・高大連携を考える

倉元　直樹（東北大学高度教養教育・学生支援機構　高等教育開発部門入試開発室教授）

平成28年9月15日（木）の午後１時から本学1号館1階の大講義室において、「高大接続を考えるー高大接続システムの改革と具体的方策ー」をテーマとして「第３回福山大学教育改革シンポジウム」が開催された。例年どおり2部構成の同シンポジウムの前半では、東北大学高度教養教育・学生支援機構高等教育開発部門入試開発室の倉元直樹教授による講演が行われた。後半では、本学の倉掛昌裕（工学部教授・福山大学入試委員会副委員長）、山口哲治（広島県教育委員会学校経営支援課総括指導主事）、藤田知久（広島県立戸手高等学校校長）、川野祐二（教育ネットワーク中国代表理事／エリザベト音楽大学理事長・学長）の4氏による高校と大学との接続および連携に関する事例報告が行われた。当日の参加者は本学の教職員のみならず、福山平成大学、尾道市立大学、広島県立府中高等学校、広島県立福山工業高等学校などからの143名であった。講演会の実施状況に関する報告は本学ホームページでも閲覧可能であるが、ここでは倉元教授のご許可と協力を得て、講演ならびにその後の質疑応答の内容を掲載する。

ただいま過分なご紹介に預かりました東北大学の倉元と申します。本日は貴重なお時間をいただきまして、どうもありがとうございます。

実は、私、代打でして。本来ですと別な方がご講演の予定でした。元々は「理想の高大連携を考える」というようなタイトルで計画されていたわけなんですが、ご都合がつかないということで、急遽、私が代打の役目をさせていただくことになりました。私自身は、あまり「理想の」という形で考えるのが得意ではございません。どちらかというと、ずっと現場で考えてきたこと、自分の経験したことからでしかお話しできないと思い、今日は「地域と大学」というようなテーマでお話をさせていただくということを考えました。どうかひとつ、よろしくお願いいたします。

先ほどからご覧いただいておりますのは・・・下手くそな写真なんですけれども・・・昨年、東北大学のオープンキャンパスを回って私自身が撮ってきた写真の一部です。お手元に大学案内が配られているかと思いますが、その最後のページですね、88～89 ページにオープンキャンパスの紹介がございます。話の中で、これをある意味メインに据えてお話をさせていただこうと思っております。近年、延べ人数ですが、２日間に約６万人来ていただいています。今年は地下鉄が開通してバスで来られる方が減ったこともあって、２日間で 500 台、去年までだと 600 台近くバスを受け入れていたというような状況でございます。これがひとつ、地域との高大連携というテーマの鍵になるかな、というようなことも思いまして、一事例ではございますが、ご紹介させていただこうと思います。

なお、今、ＢＧＭでお聞きいただいているのは、本学のＯＢなんですけれども、元オフコースの小田和正さんが東北大学のために歌を作ってくださいまして、贈ってくれたものです。76 ページにタイトルだけご紹介させていただいています。

実はこんな形で、私は普段の仕事をしています。あとで、また自己紹介を改めてする時に、お話をさせていただこうと思います。

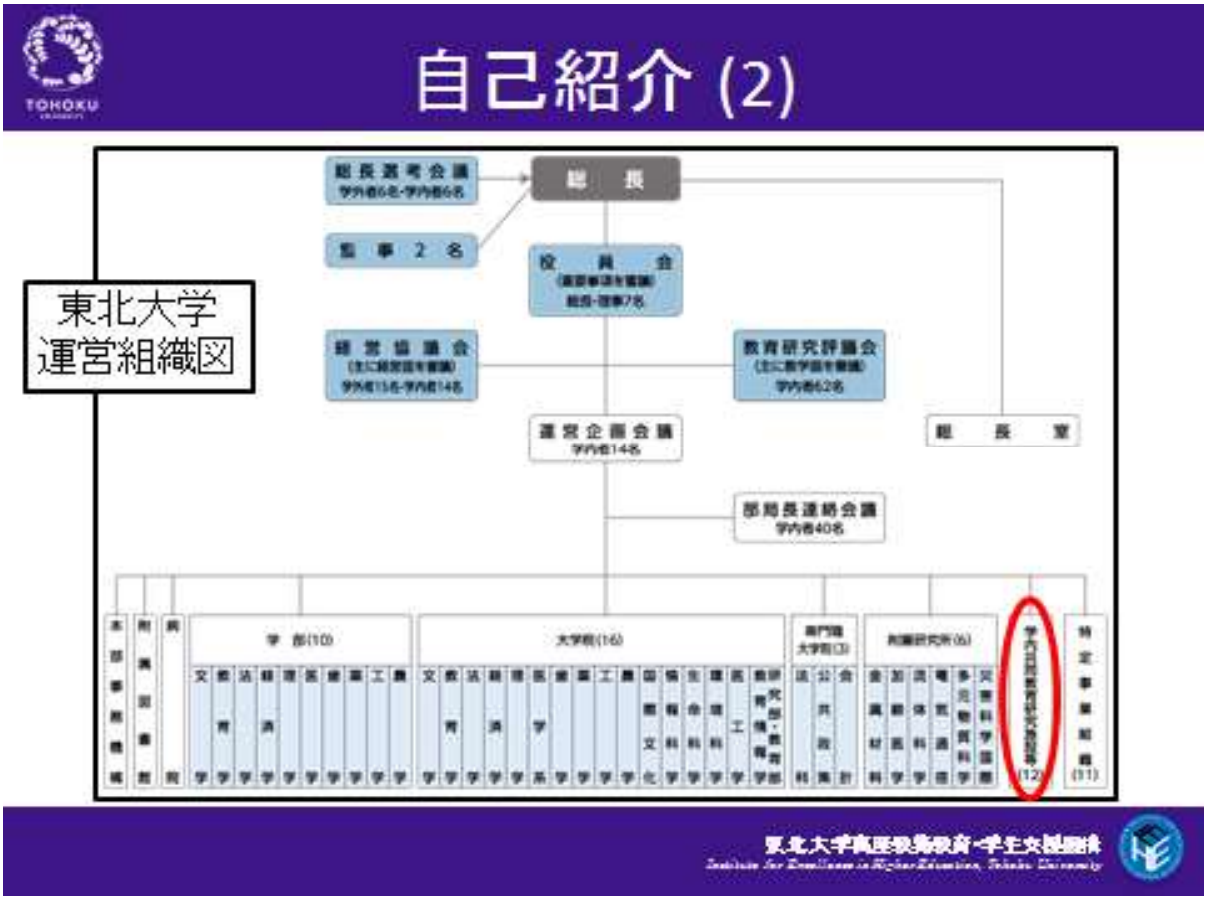
前置きが長くなってしまって、すみません。また、さらに前置きが続くんですけれどもしばらくお許しください。「地域と大学――人口減少時代の高大接続、高大連続を考える――」というタイトルで、東北大学の倉元がお話をさせていただきます。

最初は「自己紹介」です。次に、「連携」と「接続」という言葉ですが、私は使い分けたいと思っております。それから、20 年ほど前の話なんですが、私が見て、ある衝撃を受けた話をさせていただいて、その後、東北大学の話に入っていこうと思います。オチを申しますと、実は私も答を持っていま

せん。先生方と一緒に、この先のことを考えさせていただければと思っている次第です。

さて、自己紹介でございます。東北大学高度教養教育・学生支援機構というところに勤めさせていただいております。今日は、若干、大学の先生方が多いということを伺いましたので組織の話をさせていただこうと思うのですが。中々やりにくい組織構成になっています。元々は教育心理学という分野で学んでおりましたが、初職が大学入試センター研究開発部というところでしたので、そこから何の因果か「大学入試を研究する」という必ずしも自分で元々望んでいたわけではない仕事に携わって25年以上ということになります。

これは東北大学のホームページに載っております「運営組織図」というものです。なかなかよくできているなと思うのは、大学というのは、網掛けになった部分だけあればいいんですね。ここに学生がいますので。研究所で指導を受ける学生もいるので、ここまでが大学の本体です。私がいるところは、ある意味おまけです。大学にとって、なくてもいいよという部署です。ということは、どういうことかというと、私の意識としては、私どもの組織は東北大学という大学に奉仕してこそ存在意義があるという訳です。そこを無視することは考えられない。これは制約でもありますが、ある意味、自分がものを考えるベースにもなるかなと思っています。

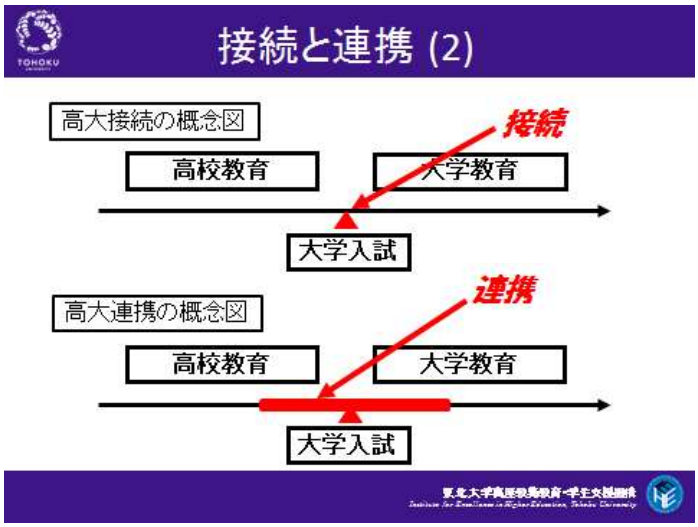


元々、私どもの部署はアドミッションセンターという形でできました。1999年４月です。後ほど話の中にも出てくる予定ですが、東北大学でＡＯ入試を始める時にそれを担当する部署として作られたものです。この時は単体で、東北大学でＡＯ入試を見るという立場でございました。それが国立大学の法人化をきっかけに、大きな組織と統合されまして、いわゆる旧教養教育を担っていた組織に小さな単体の学生支援の部署が一緒にくっつけられまして、そこからさらに大きくなって現在に至るということです。これが何故やりにくいかというと、私どもは対外的には入試センターという組織名を使っています。「東北大学入試センター」で高校の先生方には認知していただいております。実際の仕事はそこでやっています。事務組織としては、いわゆる学生支援部入試課という組織が入試を司っているのですが、そこの職員と一体になって業務を行います。ただ、教務組織としては、この大きな巨大

な組織の中の一セクションということになりますので、我々との実務と全く関係ない論理で運営がされるところがあって非常にやりにくい。単体で完結できるものであれはそれがいい、というのが本音です。

今日、空港からこちらまで送っていただく時に事務担当の方と話をさせていただいたのですが・・・組織だとか業務の話をよもやま話でしたのですが・・・入試というのは特殊だし、高大連携というのは高校とのつながりを考えることなので、これは大学全体の仕組みの中で特別なところに位置づけられるような感覚でやった方がやりやすいのかな、という個人的な感想をのべさせていただきました。

今日のテーマは「高大接続を考える」ということですが、「接続」と「連携」ということを分けてみたいと私は思っております。「接続」「連携」は似たような形で使われることが多いのですが、基本的には「接続」という言葉は、”articulation”という英語から来ています。本質的に異なるものをつないでいく。そこの「節（ふし）」のことを言うようです。接続ということを言葉通りにとらえると、端的に言えば、高校と大学の間では大学入試のことであろう。大学入試選抜方法ということを考えるのが高大接続ということになろうかと思います。



それに対して高大連携というのは、”cooperation”ということから来ているんじゃないかなと思うのですが、一致協力して事にあたるということですね。具体的には大学と高校の連携となった時には高校側から見た時には「進路学習」ですし、大学から見た時には様々な高大連携活動というのは、実は「入試広報」につながっているという側面がございます。図式化してみると、入試というのがどちらかと言えば一時点のものであるのに対し、連携というのは連続した時間的なつながりを持っているのかなというふうに考えられるところであります。もちろん大学入試そのものを時間的に長いスパンで見るという考え方もあるかと思いますが、とりあえず、それは別の話というふうに考えたいと思います。したがって、私の話の中では「接続」と「連携」を使い分けます。その後、「接続」と「連携」の関係というような話に持っていきたいと考えております。

さて、これは極めて個人的なエピソードでございます。私が職を得たのは平成２年という年でした。その頃、ちょうど父親が定年退職をしました。父の仕事は何だったかというと、学校の教員でした。養護学校の教員で最後は校長で退職をしたのですが、再就職はどうするのかな、そのまま年金生活に入るのかな、と思っていたら、ある大学に声をかけていただきました。いきなり教授で採用していただく、そんなことがあっていいのか、とアカデミックキャリアを自分なりに積み上げてきた身としては、密かに憤慨もしたのですが。ちょっとおやじの仕事ぶりを見に行ってやろうと思って、父の勤める大学に出掛けたという話です。父が勤めた学部はある地方都市、Ａ市にある大学に職を得た、第二の職を得た、というわけです。この地方都市、人口のピークは昭和 37 年だったと思います。最大で 42,000 人の人口があった。それが、私が父親を訪ねて行った平成５年には約３万人ぐらいでした。今も減少を続けていて 24,000～25,000 ですか。そういった規模の地方都市です。

そこにあるＤ大学を訪問したわけですが、その時点では既に、中核都市・・・Ｓ市としましょうか・・・近郊に新キャンパスを計画しているのだ、と。ゆくゆくは、そちらの方に移転するんだという話が出ていました。ただ、聞いてみると、Ａ市がＤ大学を非常に優遇していました。一例としては、飛行機でＳ市まで移動する・・・そうですね、自動車で移動すると５～６時間ぐらいかかるんじゃないかと思うんですけれども、飛行機だと１時間ぐらいで着いてしまうのですが・・・交通費を援助している、というような話を耳にしました。「一体、何故そこまでやるんだ？」というようなことを思ったわけで

す。しかも、Ｄ大学はがもう引き上げを考えているというのは「ずいぶん冷たいな」と若い頃の自分は思ったのですが。

ホームページで見てみますと、昭和 53 年ですね。Ａ市にＤ大学が開学をした。この後、平成８年、３年後には一部の学部を中核都市に移転をする。父が勤めていた学部ではなく別な学部から移ったのですが、平成 17 年、全ての学部をその都市に移転して、平成 20 年にはキャンパスをＡ市に委譲、譲渡するということで、Ｄ大学とＡ市との関係はこの時点で解消されました。ホームページにＡ市の「人口ビジョン、平成 27 年」という文書が上がっていましたので見てみますと、人口の問題ですね、どんどんこれからも減っていく。その中でも特に社会減、流出が大きい年については「平成８年Ｄ大学Ｂ学部のＫ市への移転」「平成 17 年Ｄ大学の完全移転」があり、それぞれ大きな転出者が要因と考えられる。この年にどんどんと人口が減った、と。特に「Ｄ大学の移転は在学の若い世代の転出だけではなく、地域に大学がなくなったことから進学する高校生が市外に移転することとなり、以降の社会減に影響を及ぼす一因となったと考えられます。」とありました。

東北大学も日本全体としては首都圏にあるわけでもなく、関西圏にあるわけでもなく、中京圏にあるわけでもない。地方に位置する大学です。そうすると、やはり大都市に位置する大学と、地方都市に位置する大学の栄枯盛衰。これが全然違う意味を持つということが実感できます。実は、調べますと、Ｄ大学は偏差値 35 という大学です。人によっては大学が多すぎる、大学としての体をなさない大学は淘汰する方がいい、というようなことを言われる方もいます。それはそれで一理あるかもしれません。しかし、そうなるとこの偏差値 35 の大学は大学として認めていいのだろうか、という話にもなるのでしょう。おそらく、それは中核都市や東京のような大都市にとっては、多くの大学の一つだからそういう議論が成り立つのでしょう。でも、あの人口動態を見ていくと、Ａ市にとっては地域の存亡に関わる問題であったんだろうなと思います。残念ながら、Ｄ大学は地域の状況を利用して、最後は引き上げてしまったという形になるわけですが。これを一つの象徴として見ると、地域と大学の関係というのは、必ずしも双方の利益が一致するというものではないのかもしれないと思ったりもします。

私の仕事は格好をつけて言えば大学入試研究ですが。もう一つの側面はリクルーターです。「東北大学って、こんなにいい大学だから、高校生の皆さん、ぜひ受験してくださいね」と勧誘しに行くのが私の仕事の大事な部分ですが。その中で「高校で東北大学の進学説明会をやってください」と言われることはかなり頻繁にあります。多い年だと・・・頻繁と言っても大したことないな、と言われるかもしれないのですが・・・十数回ぐらいは同じ東北大学の説明をするのですが。定番のイントロがあります。「自分の人生を見通すことはできますか？できるというのが半分、半分はどうだろう？もしも、『その日、その日が充実していれば、あとはいいや』と考えているんだったら、こういう大学の説明会って、いらないですよね？」みたいな話をします。「これからの自分、どこで誰とどんなふうに暮らすんだろう。生まれ育ったところで一生送るというのは、これは基本的には人の幸せのモデルだと思いますよ。」と言いながら、「たぶん、今は、その実現は、人によってはすごく難しいんじゃないかな？」とたたみかけます。

「これは、何て言うでしょう？」と聞くと、私が話をするような高校だと、ほとんどのところで、きちんと「人口ピラミッド」という答が返ってきます。「これ、ピラミッドっておかしいと思わない？」と続けます。「ピラミッドって、どんな形してる？こういう三角形だよね。これ、どう見ても『人口のしいか』でしょう？」と言ったら、ちょっと笑ってくれる子がいます。「これはおそらく、人口ピラミッドということを考えた人がいた時に、こういう人口構成になるということは想像もしなかったからだろう。これは 2050 年ですね。三十数年後の未来なので、私自身が、今、ここのあたりです。三十数年後、もし存在しているとすれば、この辺なんですけれども、あまりそこまで生きている自信はないかな」と続けます。「みんな、ここだよね？」って言うわけです。「三十数年後を見てごらん。ここのところに来るよね。皆さんが、これは生産年齢人口のところにかかっていますから、働いて支える社会っていうのは、こうなっているんですよ」という話をします。10 年ずれていますけれども、いわゆる日本創生会議から消滅可能性自治体というのが出たときには、　広島県は４割しか消滅しないので

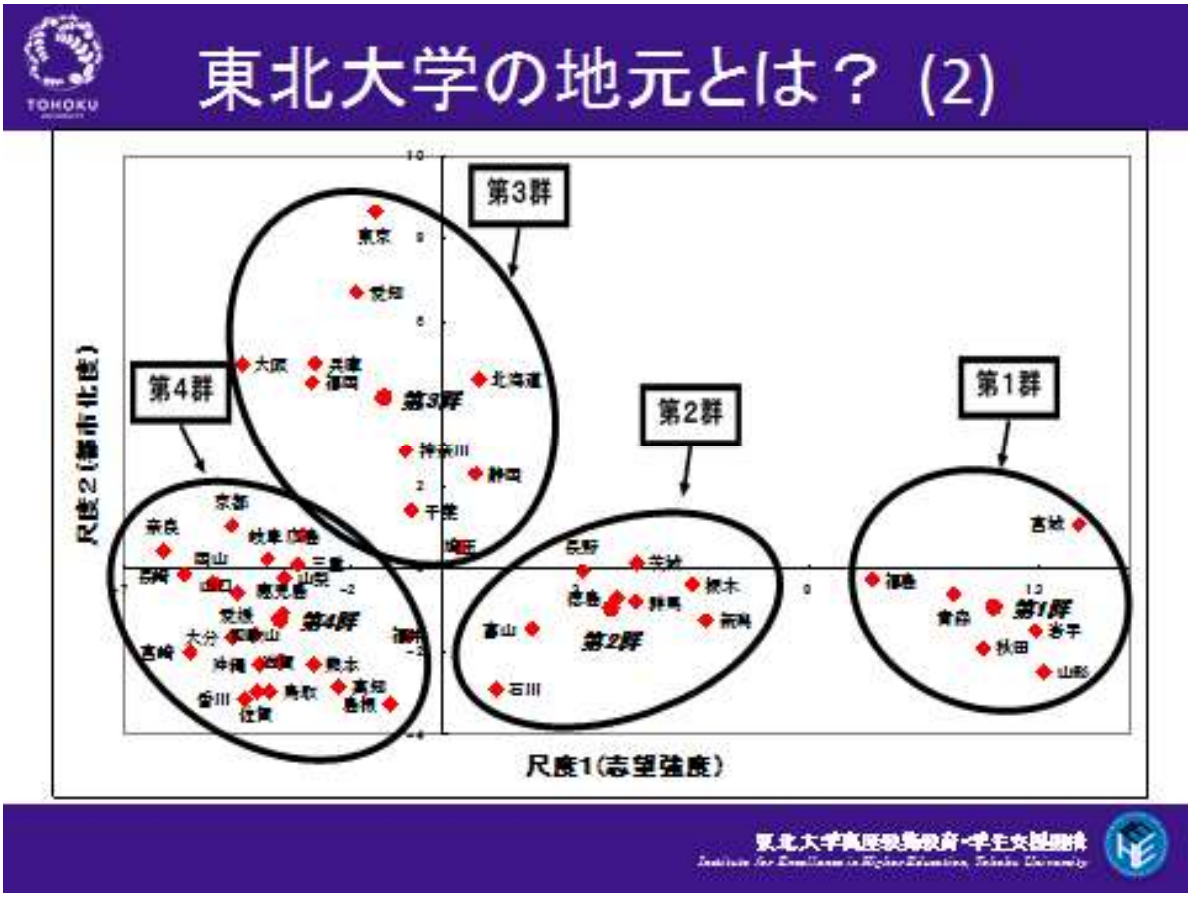
まだ大丈夫な方なんですが、田舎に行くと８割消滅するとか、そういう数字が出てくる。高齢化率約40%の社会というのは、今からは想像できない。だから、今まで、「こうしなさい。こういう生き方があなたにとっては大事だよ。」と言われてきた親の世代の生き方は、本当にそのままいくかどうか分からない。「皆さんのお父さんやお母さんって、僕と同じぐらいの年だよね。僕らの世代だと、確かにそうだった。だけど、ここから先はどうなるか。それは別な想像をしなければいけない。」というような話をします。

原点には先ほどのＡ市のことを考えたことがあるかもしれないと思っています。Ａ市とＤ大学の関係は近未来の縮図だと思います。今、東北という、やはり人口減少の早いところにいますと、足元にひたひたと本当に実感を持って伝わってきています。だから、人口減少時代の日本にあって、特に地方に位置している大学としては、地方の衰退をどう防ぐかというのは本当に喫緊の課題となるのだと思います。

ぜいたくなことを言わなければ、大学や高校は、その土地にあること自体に価値がある。偏差値がどうのは関係ないです。あること自体が大事。まず、産業としての機能があります。そこに雇用が生まれます。それから若者の居場所になります。高校にも、実は同じ構図が成り立つのですが。小さい規模で。大学があれば確実に若い人がそこにいることになります。それがなくなった時には老人だけの町になっていく。

こんな話が一つのきっかけとなって、東北大学と地域ということに関してはずいぶん考えてきたつもりですので、これからその話をさせていただこうと思います。

まず「地元」という言葉を定義したいと思います。非常に感覚的な言葉なので。これは場面を限って、大学にとっての「地元」とは何か、ということです。地方大学にとっては大学の存在が影響を与える地域である。影響というと、またこれも大雑把なんですが。要は「どれだけの若者が進学してくるか」ということで考えていいと思います。そうすると志願者の地理的分布から「地元」という概念を定義することができます。たとえば、同じ仙台にいても東北大学の「地元」と別な大学の「地元」



は違うのです。要はどこから受験生が集まってくるか、その大学を進学先として意識するかということが大きい。

東北大に勤めて６～７年ぐらい経った時ですかね。東北６県・・・「東北６県」というフレーズを普通に使うのですが・・・が「地元」だというのが、まあ当たり前の認識なのですが、これ本当に志願の動向から見て成り立っているのかな、という疑問が沸いてきました。既に様々な入試データの特徴が分かっていましたので、大学内の入試データ、それから受験産業が収集したデータを集めて「東北大学の志願者から見た都道府県の分布」という分析をやってみたのです。その結果、結論から言うと、全国の都道府県を４つに分類することができて、「東北６県」という固まりを確認することができたというのが、次の話です。これは論文としても出していますので特に隠すことはないのですが、東北大学固有の入試指標を確保して作ったものです。あまり汎用性がないと思います。もし、たとえば福山大学で同じことをやろうと思えば、福山大学に志願する、あるいは、合格する、入学する受験生の動向、特徴を数年かけて調べて、どの指標にどんな意味が出てくるのか分かってからではないとできないと思うのです。また、都道府県を単位としてよいかどうかも考えなければなりません。グラフの横軸が「志望の強さ」です。縦軸が「都市化の度合い」という形で意味が解釈できるような軸が現れきました。「第１群」と名付けたところにまさしく「東北６県」がボンと入っています。「第２群」が・・・徳島が間違ってここに入っちゃっていますが、これは指標の限界だと思うのですが・・・、東北を取り巻く近郊の７県ですね。「第３群」は別な特徴があって、100 万都市を抱えている都道府県がここに入っている。「第４群」は地理的に遠い、志願者が少ない。「東北大学って聞いたことあるけれど、私立大学でしたっけ、国立大学でしたっけ？」というぐらいの認識のところ。こんな感じで分かれてくるわけです。

これを見ると、やはり「地元」というのは、東北６県と考えていいか、ということになります。では、地域の観点から見た時に「東北大学の特徴ってどうなんだろう？」という話です。地域を意識した高大接続と高大連携はどんなものなのか。それから、高大連携と高大接続との関係はどうなっているんだろう、というような、今まで考えてきたことをこういう観点から整理してみたわけです。必ずしも、全てこの軸に添ってやることを決めてきたわけではないのですが、今まで自分たちがやってきたことをこの枠組で整理できるのではないかということで、今日の話を組み立てています。そこから地域と大学の近未来を考えてみたい、ということです。

東北大学の学部構成です。今年の大学案内は大学の全体像をパッと見られるページがないのですが、入試のページがちょうどいいかと思います。21 ページに出ています。資料は募集人員の比率ですが、全体で約 2,400～2,500 ですね、募集人員が。2,500 人ぐらい毎年入っていることになるのですが、比率で見るとこんな感じです。総合大学ですので、10 学部ある。これは一つの強みだと思います。その中で工学部が３分の１ですね。理学部が 13.5%。これを二つ合わせると、理学部、工学部で約半分を占めるということになります。どうりで男くさい大学ですね。理工系が目立つ大学というのは間違いはない。ただ文学部から経済学部まで文系もあり、他にも医療や生命系の学部があり、というようなところが特徴です。学生数、教員数を合わせ、職員まで入れるともっとになるかもしれませんし、家族を入れると、もっともっとなのかもしれないのですが、約２万人という数になってくるんですね。仙台約 100 万の人口のうちの 2%ぐらい、などといい加減なことを言っていますが。私自身も含めて皆が仙台市に住んでいるわけではないのでいい加減ですが、ただ「そこにある」だけで、そのぐらいの存在感はある。

では、東北大学は地元からどのぐらいの割合で学生が行っているんだろうか、というのがこれです。大学案内にも、そのものの数字が出ているページがございます。19 ページですね。まあ、ものは言いようで「全ての都道府県から入学者を受け入れています」という宣伝をだいたいの年はするのです。今年は残念ながら熊本県からの入学者がゼロなんですが、46 都道府県から来ています。逆に言えば、他大学と比べると地元の比率があまり高くないのです。約４割です。今年、４割を切ったというのは、実は、ちょっと衝撃ではございました。旧帝大・・・どうしても旧帝大グループということで意識して、ライバルでもあり、仲間でもあり、なのですが・・・の比較をするのですが、その中では一番「全

国型」であります。たとえば、受験生の出身地は、東大ですね、関東出身者が５割強です。京大も同じぐらいですね。名大に至っては中部地方で約８割です。九大はかなり意図して九州の比率を減らしてきたところがあると思うのですが、以前なら８割に達していたのですが、今は７割ぐらいですね。広報に使う時は､｢東北大学が一番全国から学生が集まってきているんですよ｣と話します｡その結果、何が言えるかというと・・・大学案内の 82 ページに非常に地味に小さく載せているんですが・・・自宅外生の比率が８割と書いてあります｡これは最終的には実際のデータを把握する手段ではないので、キャリア支援センターが実施している学生生活調査に依存しているのですが。居住タイプというデータがあります。グラフの形がおかしいのですが、自宅生が 13.9%しかないんです。これが大きな大学の特徴でもあるのです。

逆に言えば、これは東北地方の現実を非常によく表しています。公表していないものですからグラフそのものは配付資料からは省かせていただきますが、東北大学合格者数の地域別割合をグラフ化したものです。昭和 59 年度から始まって、今、平成 28 年度なんですが、ほぼ４割です。地元比率が低いのは、東北大学ではなくて他の大学に行っているのかなということを、やはり考えるわけです。答は、ある意味、逆に衝撃的でした。「旧帝大系＋一橋大，東工大」のどこに合格しているのかという数値を都道府県別に受験産業のデータを参考にして割り出したところ、一番「地元比率」が高かったのは北海道でした。北海道は 83%が北大に行っています。九州大学のお膝元の福岡はやっぱり高いだろうと思ったのですが 75%でした。25%は他に行っています。全国で２番目に｢地元比率｣が高いのは、何と宮城県だったのです。宮城県出身の「旧帝大＋一橋大、東工大」進学者の中で、東北大の比率が８割。正直に言うと、東北大に行けるものなら行きたいのだけれど、行けないのが現実なのです。近年だと４割というのが、いいところですね。４割５分までいったことがあります。平成 18 年だったかな。まあ、「よく頑張ってるな、この状況で。」と思ったのですが。今、こういう感じです。ついに４割を割り込んだのか、というのが現実です。

こういう状況の中で、東北大学の高大接続の話です。ここでは「高大接続＝入試」と考えてください。もちろん異論があれば、後で教えていただいて、そこで議論をしてもおもしろいかなとは思いますが。

東北大学の特徴はＡＯ入試です。こちらの資料をご覧ください。ペラッとめくってもらうと、内側の左上に募集人員ですね。ＡＯ入試の募集人員に占める比率が、経年的にどういうふうに変化してきたのかということをグラフ化しています。最初、平成 12 年度が初年度だったのですが、この時８％強で始まっていて、10 年、15 年かけて 10%ですね。18.3%というところまで持ってきたという状況です。これを実は３割引き上げよ、という目標を与えられて、今、四苦八苦しているところですが、来年度で 22%ですね。東北大学のアドミッションポリシーを見ますと・・・今、見直しをしている途中なんですけれども、おおむね変わらないはずです・・・｢一般入試では５教科、６教科のセンター試験で幅広い基礎学力を評価します、個別試験で思考力、表現力を含む高い学力を測定します｣とあります。ＡＯ入試でも同じキーワードが出てきます。それは「幅広い基礎学力」です。それに加え、もう一つ「東北大学第一志望」ということが加わります。つまり、学力では一般入試と変わらないわけです。どこが違うかというと「東北大学を第一志望にしているのであれば、ＡＯ入試という特別な入試のチャンスを与えます。第一志望の人だけのための特別な入試です」というような広報の仕方をこの 15 年やってきた訳です。ポイントは一般入試との連動性にあります。この点はまた後でお話しすることができると思います。

そもそも、ＡＯ入試とは何か。これはもう初期の頃に理論武装をガッチリやりました。当時の大学審答申なんかも読み込んでいます。要は、定義がないんですね。各大学による「自由設計入試」という表現を私は使っています。つまり、当時はアドミッションポリシーという言葉はなかったのですが、大学のあり方に合わせて自由に大学の発想で入試を設計してください、というのが根幹的な思想なのですね。あの頃は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスが平成２年にＡＯ入試という名前で始めた入試がＡＯ入試の典型だと思われた大学が多くて､学力検査を抜きにして書類だとか面接で選抜をするもの、という理解をされました。私どもは全然違っていて、要は「東北大学というのは研究大学だよね」と

いうことです。だから、学力のところは一緒。ただ、やはり、東北大学に入りたいという受験生を取りたいよね、ということでそういう設計をしたのですね。ですから、他大学のスタンスとは全く違う設計になっています。

ただ、自由設計なので、各学部がそれぞれの考え方を少しずつ押し出すことができるというのがメリットだということで、選抜方法にも、ＡＯ入試をやるもやらないも、学部の考え方が反映しています。ということで、ＡＯ入試のパンフレットを見ていただけると分かるのですが、全学揃ってＡＯ入試を始めたわけではない。それぞれの学部にお任せしたところ「ＡＯ入試っていいものじゃないか」と考える学部がぼつぼつと増えてきた。平成 19～20 年度ぐらいには、特に後期日程の廃止ということが国立大学で認められたので、それをきっかけにＡＯ入試に参入してくる学部が多くなりました。平成 21 年度の文学部をもって全学部で実施するということになったわけです。トップダウンではなかったわけですね。したがって、選抜方法には各学部の考え方が反映しています。ただ、とにかく、この割合ですね。全募集人員の２割、これからそれを３割まで引き上げるというミッションがあります。ということは、あまり凝った選抜はできないのですよ。無理です。あっさり仕上げるしかない。だから、たとえば面接だとか、そういったところに秘訣や秘密があるわけじゃない。ただコンセプトに特色があります。

一般入試と求める学生像に違いを設けないというところが１番です。ＡＯ入試で一番大事なのは何ですかと聞かれます。それは学力です。「だって大学の中に入ってから、一般入試の学生とＡＯ入試の学生と、やることが違うわけじゃないでしょう。同じことをやるのでしょう。東北大学というところは研究をする大学なんだから、その基礎として一番大事なのは何か。それはもう高校でやる勉強に決まってるじゃないですか。だから、そこは一緒だよ。ただ、一般入試だと点数で並べて上から順に取るわけだけど、ＡＯ入試に関して言えば、君たちが東北大学に行きたいという思いを伝えられる機会だよ。」という説明ですね。ということで、高校側から見ると、最終的には一般入試の前期日程というところに目標を置いて準備をしてもらいますから、リスクが少ないですね。ＡＯで受かればそれで良し。落ちても一般入試で受かる確率がありますよ、と。ここがすごく大事です。それをデータでお見せします。そういうコンセプトで設計しました。大まかな方針としては、東北大学を目標にしてもらえば学力を中心に力がつく。ＡＯ入試対策、特別なことはいりません。強いて言えば、計画的な勉強ですねということですね。これは個人の受験生にとっては、厳しいメッセージなのです。他の人がまだ受験が先だということでのんびりしている時に、自分だけ追い込みのような勉強をしなきゃいけません、ということです。ただ、ある意味、少しマイナスの面もあって、東北地方の高校行事の前倒しには影響を与えたかな、という気はします。そこはまた後の話になると思います。

もう一つ、推薦ではなくてＡＯではあるのだけれども、必ず高校の先生と相談をして出してきて欲しいということ、これは強調しています。九州大学だと高校は関係がないというスタンスで、高等学校から抗議を受けたりしたこともあったようですが。私たちとしては、落ちることのリスクを考えた時に、ＡＯに出願しただけで受かったと思うようだったら、これは非常に怖いわけです。落ちたら、立て直して一般入試に受かってもらわなきゃいけない。それができるかどうかは、自分だけでは分からないわけです。だから信頼できる学校の先生にちゃんと相談して、向いているか確認してから出願してね、というようなやり方です。

まとめますと、東北大学型ＡＯ入試の一般入試との共通部分は学力です。それに加えて第一志望であることを要求します。したがって、選抜資料には学力的な要素を含みます。意欲は面接と志願理由書というのを書いてもらうのですね。どうして東北大学を受けたいか、ＡＯ入試を受けたいか。その二つがセットであります。繰り返し申しますと、第一志望の受験者のための特別な機会なので、一般入試受験まで視野に入れて勉強してきてね、というメッセージが重要になっています。他のポイントとしては、書類だけの選抜はなるべく避ける。高校の先生のお書きになる部分を最小限にするということで、高校の負担を軽減する。

制度をまとめてみます。本来は入試の説明に来たわけではないので、あまりここで時間を取っても仕方がないのですが、大きく分けてⅡ期とⅢ期というような区分です。大学案内の 22 ページが一番

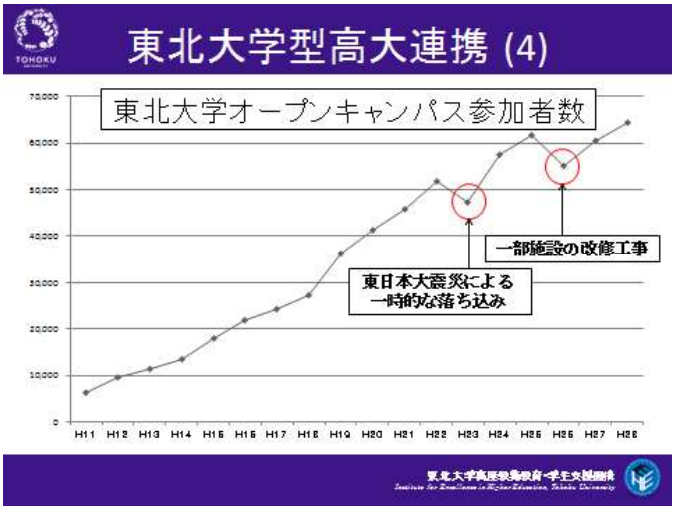
分かりやすいんじゃないかと思うのですが、Ⅱ期というのがセンター試験がつかないタイプです。これは現役生限定で 11 月に試験があります。推薦入試より気持ち前に志願をしていただいて、・・・推薦入試が 11 月からなので 10 月の最後の週に出願をしていただいて・・・11 月の第３週ぐらいに試験をやって、できるだけ 11 月中に合格発表、というスケジュールです。Ⅲ期はセンター試験が終わった後です。センター試験が終わった直後に出願をしていただいて２月６日に二次試験をやって２月８日に合格発表。同時期に一般入試の出願をしていただくというような流れです。学部によってⅡ期をやる、Ⅲ期をやる、あるいは両方をやる、という選択になっています。Ⅲ期は既卒生を受け入れている学部もあります。

選抜方法や試験問題が学部によって違います。過去問は今年までは冊子にして限定配布をしていました。東北大学用語があって「小論文試験」というのは中身は小論文ではないのです。大学に入学してからの研究の基礎となるような、高等学校時代に学ぶ教科・科目によって培われる能力を測る試験をやっています。「小作文」は採点しないで面接の参考にする。今年からはウェブで公開ということで、今、進めています。これを見ると、だいたいどんなことをやっているのかお分かりいただけると思います。

東北大学のＡＯ入試は世間では割と成功していると評価していただいているのですが。コツは何かというと、皆、一般入試の準備をしてきているのですね。そこは同じです。したがって、ＡＯ入試を不合格になって一般入試で合格した人数というのが近年だと 200 人ですね。300 人を越えた年があったんですけれども。2,500 人のうち１割近くがＡＯ入試リベンジ組というのが、たぶん、西側の大学では衝撃的なぐらい非常識な話なんだと思います。これは私が考えたコピーなんですけれども、「常識を越えていこう」と。これが一つのフリになります。後で結びつけます。

もう一つ、高大連携です。高大連携。これは異論があるかもしれませんが、大学から見たら入試広報です。どうやって自分の大学が良いものだと思ってもらって、どれほどの志願者、本気の志願者に来てもらうか、そのためにやるという側面が強い活動になります。これは平成何年だったかな。10 年ぐらい前に方針を立てまして「特色化、焦点化、広域化」。オープンキャンパス、高校訪問という形で高校生に直接アプローチをする。「入試説明会」というのは高校の先生方に我々の方針を説明する説明会です。それを毎年 20 カ所ぐらい開いています。広島でも毎年やっています。「進学説明会」は全国で４カ所になります。直接、保護者、それから高校生、浪人生も含めて東北大の説明をする。それから「広域化」。志願には地域的な特性があるのですが、大学の側から見た時、やっぱり志願者の輩出される地域が特定のところに偏っているよりも、全国から来ていただくほうが多様性の確保という意味でメリットがあるので、なかなか難しいですが、広域的な活動をやろう、という３つの方針を立てて活動しています。

その中で、私どもの部署でやっているのは、こういう活動です。一つはこの大学案内ですね。入試課では入試広報係というセクションが担当します。実は全学には広報課があるのですが、それとは別に入試の部分だけ、つまり高校生・受験生向けの広報だけ切り離して入試課に持ってきています。それは非常にありがたいです。今年の大学案内は業者が変わったばかりなので不満なところもいっぱいあるのですが、高校生向けに厳選された情報が入っている。全学の広報に関係する人が口を出してくるようになると、どんどん拡散して分厚くなります。それをしなくていいのがメリットです。入試説明会、高校訪問、出前講座などをやるのですが、一番の特色はこの二つです。オープンキャンパスと進学説明会。われわれは業者主催の説明会や懇談会にも出ますが、厳選



しています。お金を取るところには行きません。タダで来てくれと言われても、簡単には行きません。マッチングですね。参加者のマッチングが取れて、私どもにもメリットがあるかどうか。タダでもいいから来てくれ、と言われたら初めて検討します。すごく居丈高ですが。基本は自前です。イベントを打つ時は自前が基本。事務職員が非常に大変だと思います。業者を使ったほうがずっと楽なんですが、それはしないというのが私どもの方針。ポスターも作っています。今年のオープンキャンパスと進学説明会のものです。一つ特徴があるのは、自分たちだけでできないところは他大学にも助けていただこうということです。たとえば、大阪だと東北大学だけでは集まらないので、筑波大学と合同です。去年まで新潟大学も誘ったのですが。完全単独は東京。東京は単独です。800 人近く来てくれます。単独でそのぐらい来られるので、そこは自分たちだけでやる。それ以外のところは、ライバルでもあるけれども協力しましょう、ということですね。

オープンキャンパスですね。オープンキャンパスというのは、進学説明会とは逆にキャンパスに出向いていただくイベントです。毎年７月後半の平日２日間やります。最初は平成 11 年だったですね。始めた時は 6,000 人です。今、10 倍です。今年 64,000 人という報告を受けています。平成 23 年３月 11 日に震災がありました。その年にもオープンキャンパスをやったところがすごいなと思ったのですが、やりました。参加者は減りましたが、回復しました。この年に落ちているのは図書館が改修工事に入ったのですね。図書館がけっこう人気で人数を稼いでくれるのですが、それが減ったという形です。これ、どこまでいくんだろうと思っているのですが、この辺で天井を打ってくれないと、今はさばくのが非常に大変になっています。これは放っておくとこうならない。学内で反対が出て止まっちゃうのですね。今日はその話は用意してきていないのですが、どうやってここまで持ってこれるようにしたかっていう話もあります。現状、入学者に占める東北大学オープンキャンパス参加者の比率。これがここ数年５割を越えています。これは驚異的な数字です。というのは、東北地方出身者が占める割合が４割切るぐらいです。東北地方出身者全員がオープンキャンパスに来たとしても、ここには届かないですね。そのぐらい関心を持っている人たち、受験する者が集まってくる。そこで「こういうことをやりたい」というのを見つけて、東北大学を受験してみようと思って、勉強して、受験して入ってきてくれる。学部ごとには差があります。薬学部が非常に強いですね。

余談ですが、大学ランキングという朝日新聞出版で出している本では、かなり高く評価をしていただいています。「高校からの評価」は昨年まで 11 年連続全国１位を獲得させていただいておりました。約 800 大学ある中の１位です。今年、編集部が怪しいと思ったらしくて、東北大学が不利になるようなランキング指標の変更をしたのです。何となくそういう予感がしていたので、例年だと大学案内に大学ランキングの話を載せるんですけれど、今年は削っておいて良かった。東大に抜かれて２位になりました。その中に「広報活動が熱心」という項目があります。これを 2002 年から 2014 年度分までグラフ化したのがこれです。実は、一番最近のデータは変わっているのですが、2014 年までのデータでいくと、絶対王者が立命館大学。十億円広報費にお使いになっているという噂も耳にしました。本当かどうか分かりませんが。私どもが一生懸命お願いしても、その 100 分の１も出てこない状況です。実は東北大学はずっと立命館大学に次いで２位でございました。それが、この２年ほど立命館大学を抜いてしまったのです。１位になってしまいました。広島大学も上位ですね。こちらの大学は、以前は良かったんだけれども、最近は少し振るわない。先ほど名前を出した新潟大学は広報でこの時期までは伸びています。最近、広報費を削ったみたいで、少しプレゼンスが落ちている状況ですが、こういう評価をいただいています。

ここから「接続」と「連携」を接続させていきます。こういう高大連携活動、入試広報活動と高大接続。これは連動しています。というのは東北大学の入学者は、オープンキャンパスに参加するＡＯ入試から受験してきている比率が高いのです。流れとしては、高大連携活動、特にオープンキャンパスに焦点化して、第一志望の受験生を作る。そしてＡＯ入試から一般入試までの受験の計画を立ててもらい、彼らに入ってきて支えてもらう。オープンキャンパスの参加者、地域特性を考えると、やはりこれは大学に来てもらうことになりますので、どうしても高校教員の影響が大きいです。したがって、設計は完全にオープンだけれども、結果的にＡＯ入試が地域枠的な作用をしているということ

がデータで出てきます。入学区分ごとのオープンキャンパスの参加者の比率です。一般入試のみで受験をした者は４割強オープンキャンパスに参加したと答えています。ＡＯ入試を受けて、落ちたけれども一般入試で入ってきた学生は73%がオープンキャンパスに参加しています。ＡＯ入試で合格した受験生は78%がオープンキャンパスに来ています。出身地域、これですね。関東からもけっこう来てくれていますね。４割ぐらいがオープンキャンパス経験者です。東北地方の出身者になると約８割です。だから、東北大学が視野に入る受験生はほぼオープンキャンパスに来ていることになります。

実態を言えば、１、２年生の多くはバスで連れて来られます。来たいか来たくないか分からないんだけれども、とにかく来ます。３年生は自分の意思で来ます。３年生、それから浪人生の時、受験の年に来たのと、１、２年生で来たのと、若干差があります。それでも効果があると思っています。何故オープンキャンパスに対して学内から深刻な批判が出ないかというと、このデータを毎年、入試の委員会で開示しています。「こうしろ」とは言いません。私どもは最初に申しましたように、学部に奉仕する立場なので学部に指示できる立場ではないのです。しかし、毎年「オープンキャンパスの参加者は、こういう結果です」と学部にお返しすると、このデータを蹴っ飛ばして「オープンキャンパスを縮小しろ」という意見は年々出て来なくなってきました。今は、まあこういう状況です。

これが地域枠的な作用を及ぼしているというのは、このデータですね。ＡＯ入試の定員に占める比率です。現在２割ぐらいですね。だから、ここにぴったり添っていれば、期待値ぐらいの割合がＡＯで入ってくるはず，ということです。東北の平均ははるかに上回っています。やっぱり、東北地方の方がＡＯ入試に熱心ということが言えます。各県に見て細かくまとめると、もっと面白いことが分かってくるのですが。非常にオープンな設計でありながら、結果的に地元に対してのアピールをしてきた。地域を何とか引き上げるという努力をしてきたと見ていただきたい。

この高大連携活動ですが、ガンガンやればいいかというとそうでもない。オープンキャンパスは２日間だけです。３日にしようなどという話を出したら、もう大変なことになる。とんでもない、と。ただし、この２日間は全力投球です。高大連携活動では色んなことを言いますが、大学側としては良い学生に来て欲しい。ただし、オープンキャンパスには社会貢献の意味もありまして、来ている人たちは受験生だけではないのです。家族連れで遊びに来ます。そういったことも含めてのオープンキャンパスだと思っていますが、それでも最終的には我々が望む学生が欲しい。一方、高校。これは進路学習の一環でしょう。生徒の進路実現に向けて、進路探求をさせる。そのための情報をここで拾ってもらう。大学としては、学生獲得のところだけに目が行くと高校教育をどうやって強くしていくかという視点が抜けてしまう。特に地元ということを考えると、地元の高校教育の基盤強化は自分たちの大学の存立の前提、基礎なんですね。もちろん、どこか都会に移ってしまえばいいや、という考え方なら別だろうと思いますが。だから、学生獲得というのは、入試広報を通じて見ていると、良い学生を取るのではなくて「育てる」のだな、と思います。高校と一緒になって。

他方、高校と生徒の将来基盤です。大学を強くしていくということは何か。「大学に何人入れた、入った、良かったね」だけでは受験産業と一緒なんです。そうじゃないのです。大学と高校で一緒に、私たちを越えて未来を支えてくれる、あの「人口のしいか」の社会を支えてくれる彼らを、そういう人たちを作っていく。だから高校にも言います。入れりゃあいい、ということではない。入ってから活躍できる基礎をつけて送って欲しい。

そうなってくると、今度は別な落とし穴があります。執行部も高大連携だけはどんどんやりなさい、と後押しすることになる。でも、大学のキャパシティ、限界がある。人もお金も時間も。大学が突っ込めば突っ込むほど、高校側は、それに応じようとする。ただ、たとえば高校が望まないアプローチもありますから、高校自身の首を締めるということもある。だから、「省エネ型」で行きましょう、という話ですね。大学の全活動をどう考え、その中で高大連携に力を注げるのはこのぐらい。それをどうやって効率よく使っていくか。少なくとも、うちの大学では「省エネ型」を目指すべき。ということは逆に言えば、ここは全力投球というところをしなければいけない、それ以外のところは申し訳ないけれども、のべつまくなしの付き合いはしない、というメリハリが大事なのではないかと思います。高大連携活動とは非日常的活動であるべきだと思います。高校でやっていること、大学でやっている

こと、高校生がやること、大学生がやること、グチャグチャにしてはいけません。その中で非日常的にエッセンス、スパイスとして高大連携活動がある、というのが望ましいあり方ではないかと思います。

地域と効果。これは地理的な特性に依存します。この高大連携のあり方が、地域と、それから高校や大学とのあり方に密接に関係してくるところなのではないかと思います。 もう１回繰り返します。「全力投球型」だと大学も高校も、ひいては地域も疲弊してしまいます。それぞれの地域の事情があり、高大接続関係があると思います。実際にその大学に行くのか、行かないのか。そういうこともある。そこから最適な方策を探っていくことが必要なのではないかと思うわけです。暗黙のうちに自分たちはそれを模索してきたつもりではあります。

さて、ここで終わればハッピーな話ではあるのですが、現実は厳しい。これは東北大学の一般入学者選抜前期日程試験の志願者数の推移です。このへんは別にして、毎年増えたの、減ったのと大騒ぎしますけれど、本当はこの 10 年ぐらい極めて安定していますね。全体として見ると。ここにちょっと穴があるのですが、これは東日本大震災の翌年です。７％ぐらい減りました。しかし、このへんのトレンドから見たら微々たるものです。関係ないぐらい。受験生に影響を与えるのは大災害よりも入試制度だったりします。全体を見ていると、近年は平穏無事なのですよね。ところが、中を見ると、そんなことは言えない。実は、平成 14 年度というのは最近で東北大学の一般入試の前期日程に一番多くの志願者をいただいた年です。そこを起点にして、その後、地域別に志願者がどうなったかを見ています。赤が東北地方で、１回ダンと落ちるのですが、これはこの年から医学部保健学科ができて定員が増えたこともあってすぐに戻ってきてくれました。と、安心していたら、こうです。ここ４～５年、下げ止まらないのです。バケツの底が抜けたように減っています。ピーク時のなんと 500 人減です。それをどうやって補っているかというと、ここです。関東地方。一時、400 人ぐらいバッと落ち込んだのですが、今は戻ってピーク時と同じくらいになっている。

これが、実は、広報活動のもう一個の進学説明会の開催と関係がある。平成 18 年度から東北大学で進学説明会を東京で始めました。これ１回、ぐっと参加者が伸びたのですが、震災でボコッと落ち込みました。これはかなりショックだったですね。ここまで積み上げてきたものがパーになってしまうのか、というような気持ちになりました。こちらは全体参加者数です。各学部の講演をやりますので、その延べ数を取ったものです。これがもう１度、今、回復してきています。今年、参加者数が減ったのは、静岡でも今年から始めたということがあって、一定数、静岡に流れたようです。

要は、やっぱりもうキツいのです。東北地方の子どもたちのモチベーションと学力を何とか引っ張るという努力はしてきたのだけれど、今、これが限界かなっていう感じです。　そうすると大学としては、やはり定員をグッと減らすのではなければ、その分、他の地域からも来ていただかざるを得ない。そういう努力をしていかなければならない。これは、・・・すみません、口幅ったいことで、別に批判をするつもりはないのですが・・・高大連携活動の見事な実践例を聞いていると大変な負担だな、全力投球しているな、と思うことが多いのです。都会だとできるかもしれません。でも、同じことが地方でできるかというとけっこう厳しいと思います。条件が違う。高校生のご家庭の経済的な状況というのは、地域で聞いてみると、特に地方に行けば行くほど厳しいですね。家計に負担をかけるようなことはなかなかできない。学校外のリソースって、上品に言ってみましたが、いわゆる受験産業ですね、お金を出して買うリソースそのものがないのです。その点、仙台は都会なんです、東北の中では。仙台だけが都会。あとはどこの県庁所在地に行っても、ない。都会と同じやり方は地方では持たないのではないかと思います。地方は地方なりにできる範囲でできる労力でやることを考えていく必要があるのではないかと思います。

今、進んでいる高大接続改革、これにこのまま乗っかってしまうと地域間格差はますます拡大する。経済格差はますます拡大する。東北大学の名誉のために言いますが、東大、京大と違うのは、学生の母体・・・これもすみません、失礼になるかもしれませんが・・・東大の場合はいわゆる高校別の進学者数のランキングで 10 位まで国立か私立ですね、今年の場合ですけれども、11 位にようやく都立日比谷高校が登場する。京都大学もトップ 10 のうち公立が４校ぐらいだと思います。東北大は上位

30 校まで公立です。私立高校の関係者がおられたらすみません。つまり、特別に恵まれた環境、特別にお金がある子たちが来るのではなくて・・・もちろん貧困の問題というのは深刻なので、貧困家庭から東北大に来るのはなかなか難しいと思いますけれども・・・普通の子たちが努力をして届く大学なのです。だから、この問題は東北地方のことも含めて極めてクリティカルな問題だと思っています。対策はこれから考えていかないといけないだろうな、と思います。

ということで、大学の方針です。うちの総長が国大協の会長という、なぜか今、そういう立場になっていますので、国立大学を背負って物を言わなければいけない。その時に、今の政策実行者に対して「今の教育改革はおかしいですよ。格差が拡大しますよ」という正面切っての議論はなかなかやりづらいわけです。理念は分かります。ただ、たとえば、「新しいテストのやり方みたいなことは現実的ではないですよね。そこは任せていただけませんか？」というのが交渉ですね。そうすると、東北大学としては、まず、今、推奨されている「学力の３要素」みたいなものを伸ばしていくような入試としては「今までやってきたＡＯ入試があるじゃないですか。これを評価していただいているのだから、とにかく最大限で３割までもっていきます。」となるのは必然だと思います。ただし、総長には言っています。「３割以上は絶対に無理です」と。「これは本当にマックスです」と。

その方針の下で、国立大学の入試を担当する者としては、これから大学の作題能力が問われると思っています。新テストが導入されても・・・それぞれの大学によってお考えやお立場は違うと思いますが・・・使い物にならない可能性がある。その時に、「全部自前でやりましょう」と言うと学内ではウケます。少し前だと国立大学の個別試験全廃などという議論もありましたが、今はあり得ないです。逆に、そこが強化されます。それぞれの大学がきちんと高校教育を伸ばしていけるようなメッセージを試験問題を通じて出せるか。それは旧帝大である我々の、しかも東北地方に基盤を置く我々のミッションなんだろうな、と。これは執行部も共有していると思っています。

地域のトップ層の学力維持向上。これが私たちの立場では地域の活力維持の源泉になっている。ジレンマはあります。東北地方はどんどん疲弊しています。その中で、そこに基盤を置きながら、大学の競争力も維持していかなければいけない。地域との関係を保ちつつ、このジレンマをどう解決するか。実は鍵は見つかっていないのですが、当面は「地元」と言える地域を拡大していくしかないというところです。ただ、逆に言えば、東北大学という特色が、若干、希薄化していくということは否めないかな、ということを個人的には思っている次第です。

まとめます。地方においては、大学、高校がとにかくそこに存在するということ自体に意義があります。まずここから考える必要がある。高大連携は、当然、高大接続のあり方を抜きにしては考えられない。そして地域、大学の特色に応じた高大連携というのがあると思います。都会と同じことはできない。それは当たり前です。

今、私も悩んでいます。疲弊する地方を支える解決策。もしヒントがいただけるとすれば、この機会を大事にして持って帰りたいと思っています。

ということで、ご清聴ありがとうございました。